C 年復活節第 4 主日　ヨハネ10章22―30節

［直訳］

22 起こった　そのとき　神殿奉献記念祭が　エルサレムの中で、
　冬で　それはあった、
23 そして　歩いていた　イエスは　神殿の境内の中で　ソロモンの柱廊の中で。
24 そこで囲んだ　彼を　ユダヤ人たちは　そして　言っていた　彼に、
「いつまで　私たちの魂を　あなたは取り上げる。
　もし　あなたが　あるなら　メシアで、
　あなたは言いなさい　私たちに　はっきりと」
25 答えた　彼らに　イエスは、
「私は言った　あなたたちに　そして　あなたたちは信じない。
　業が　ところの　私が　行う　私の父の名の中で
　これらのことが　証しする　私について。
26 しかし　あなたたちは　信じない、
　というのは　あなたたちはない　私の羊たちの中から。
27 羊たちは　私のものは　私の声を　聞く、
　そして私は　知る　それらを
　そして　それらは従う　私に、
28 そして私は　与える　それらに　永遠のいのちを
　そして　決してそれらは滅びない　永遠に
　そして　奪わない　誰かが　それらを　私の手の中から。
29 私の父が　ところの（ものは）　私に与えた　すべてより　より大きく　ある、
　そして　誰もできない　奪うことが　父の手の中から。
30 私は　そして　父は　一つで　ある」。

［新共同訳］

22 そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。23 イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。24 すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」25 イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。26 しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。27 わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。28 わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。29 わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。30 わたしと父とは一つである。」

①構成

ⓐ22―24節

イエスとユダヤ人たちの論争が起こった時と場所が示される。神殿奉献記念祭のとき、イエスはエルサレム神殿の境内にいて、ソロモンの柱廊を歩いている。ユダヤ人たちはイエスを囲み、イエスがメシアであるかどうか、はっきり言うように迫る。

ⓑ25―26節

イエスは「あなたたちは信じない」を二度繰り返して、ユダヤ人たちの不信仰を強調した後、26節では彼らが「信じない」理由が述べられる。ユダヤ人がイエスの業を見ても信じないのは、彼らが「イエスの羊」ではないからである。そこで、次の段落からはイエスと羊との関係が説かれていく。

ⓒ27―28節一行目

この段落は四つの短い文章で出来上がっている。「羊たち」が私の声を聞くと、「私」はそれらを知る。「それら（羊たち）」が従うと、「私」は永遠のいのちを与える。「羊たち→私」の関係が、二度にわたって繰り返されており、この繰り返しによって、「羊たち」と「私」との間の深い関わりが表されている。

ⓓ28節二行目―29節

この段落も四つの短い文章から成り立っている。29節前半には写本上の問題があり、「わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です」（新改訳）と訳すこともできる。新共同訳の立場に立つなら、「父が私に与えたもの」、つまり羊が主語になるので、この段落でも一番目と三番目の文章の主語は「羊たち」になる。そして、二番目の文章「誰かがそれら（羊たち）を私の手の中から奪わない」と四番目の文章「誰も父の手の中から奪うことができない」とは、明らかに対応している。この段落では「羊たち」と「奪おうとする者」の関係が述べられるが、誰も羊たちを「私と父の手」から奪えないとされ、羊たちが「永遠のいのち」に留まり続けることが強調されている。

ⓔ30節

前の段落の「私の手の中から奪わない」と「父の手の中から奪うことができない」との対応関係にすでにほのめかされているように、イエスと父なる神は羊に「永遠のいのち」を与え、誰にも奪われないようにと守ることにおいて一つである。

②イエスはメシアなのか（22―24節）

ⓐ神殿奉献記念祭（宮清めの祭）は、アンティオコス四世エピファネスによって汚された神殿を、紀元前一六四年に清め、再奉献したことを記念する祭りである。この祭りはソロモンの神殿と第二神殿の奉献を記念するものでもある。現在でもハヌカ祭として十二月に行われている。イエスはすでにエルサレムで仮庵祭のときにも、ユダヤ人たちと論争している（七1―八59）。論争の場はエルサレムであるが、秋の仮庵祭から季節が移ったことを22節は示している。

ⓑユダヤ人たちはイエスを囲み、「いつまで私たちの魂をあなたは取り上げるのか」と言う。「魂を取り上げる」という表現は「不安定な心理状態にする・心を宙に迷わせる」を意味する。ユダヤ人たちは「もしあなたがメシアであるなら、はっきりと言いなさい」と言う。7章から8章に述べられている論争、群衆やユダヤ人、ファリサイ派の人々とイエスの論争でもイエスの正体に

ついての問いが繰り返されているが、「イエスはメシアなのか」という問いが、ここでは直接イエスに向けられる。ユダヤ人たちはイエスが何者なのかを知ろうとするが、イエスは彼らがイエスを信じないことを知っている。

③あなたたちは信じない（25―26 節）

ⓐ「あなたたちは信じない」が 25 節と 26 節に繰り返されている。イエスが「父の名によって」行う業がイエスについて証ししている。しかし、イエスの業を見てもユダヤ人たちは信じない。イエスの業と父による証しについては、5 章 31 節以下でも「父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証ししている」と述べられている（五 36）。

ⓑユダヤ人たちが信じないのは、彼らが「私の羊に属していないから」であるとイエスは言う。10 章 1―18 節に、羊飼いと羊のたとえが語られている。25―30 節は、24 節の「もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」というユダヤ人たちの質問に対する答えであるが、イエスは羊飼いと羊のたとえに関連させて、ユダヤ人の不信仰を示している。

④羊たちと私（27―28 節一行目）

ⓐ羊飼いが自分の羊を可愛がるように、イエスも「私のもの」に無関心ではいられない。だから、「羊たちは」と述べた後に、「私のものは」を加えて、羊への深い思いを表現している。羊が聞く「私の声」にはこの思いが込められている。だから、羊が「聞く」のはただの音声ではなく、自分たちへの愛である。

ⓑこの羊飼いはそれぞれの羊の個性を知り抜いている。おのおのが何を求め、どのように導けばよいか、よく心得ているから、羊からの信頼を獲得でき、羊は安心して彼に「従う」ことになる。この段落では主語が「羊たちは→そして私は→それら（羊たち）は→そして私は」と展開されており、このような展開によって羊と私との密接な相互関係が表されている。この関わりは「聞く→知る→従う」というように進展し、その目標は「永遠のいのちを与える」ことにある。

ⓒこの「永遠のいのち」は「永続する生命」といった意味合いを含むが、ヨハネにとって大事なことは、永遠である神と触れているという要素である。「永遠のいのち」とは、人がその生涯の中で神に支配されて生きるときに得る「いのち」のことである。イエスを通して神に触れるとき、生命が刷新され、新たな真実の「いのち」が与えられる。20 章 31 節にはヨハネ福音書が書かれたのは「あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」と述べられている。「永遠の命を与える」というイエスの言葉はこの主題に結びついている。

⑤誰も奪えない（28 節二行目―29 節）

ⓐ「永遠のいのち」が与えられた者は決して滅びることがない。誰かが奪おうとしても、失敗に終わる。「私の手」と「神の手」は彼らを守り、手放さないからである。ヨハネ福音書ではしばしば「滅び」と「永遠の命」が鋭く対比される。例えば 3 章 16 節には「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」とある。独り子を信じる者は「永遠のいのち」へと招かれ、信じない者は「滅び」へと

向かう。私たちの前にはこの二つの道だけがあり、この二つの中間の道といったものは存在しない。永遠のいのちを与える「私」との親しい交わりに入った者は、決して滅びることのない救いを生き始める。

ⓑしかし、この段落で「奪う」が二度も繰り返されることから分かるように、羊は常に奪われる危険にさらされている。羊は自分を守る手だてを持たない弱い動物である。それでも羊が滅びないのは、「私」と「父」が一緒になって守っているからである。「私」と「父」が一緒になって羊を守るのは、彼らが「すべてより大きくある」からであり、最高に大事な存在だからである。

ⓒこのようなイメージは、ヨハネ福音書が書かれた一世紀後半のヨハネ共同体が置かれた状況を思い起こすなら、いっそう分かりやすくなる。この頃、ユダヤ教はキリスト教を異端と宣言し、会堂から排除した。このような処置はヨハネ共同体内部に動揺を引き起こした。このような共同体にとって、イエスの言葉は力強い励ましと映ったにちがいない。

⑥私と父は一つ（30 節）

ⓐ5 章 19 節に「…父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする」とあるように、イエスは父と一つであるが、ここではさらに具体的に、羊を守るという働きにおいて一つであるとされている。前の段落の「私の手の中から」と「父の手の中から」の対応関係がそれを示している。聖書の神は人間に無関心な神ではない。「見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする」（エゼ三四 11）とあるように、どこまでも人間に関わる神である。「私」と「父」は羊を探し求め、守ることにおいて一つである。イエスと父とが一つであるように、羊たちも一つにされ、イエスと父とに結びつけられる。だから、「私」と「父」の手から誰も羊を奪うことはできない。

ⓑ「私と父は一つである」という言葉は第一には、御子の権能が父のものと異ならないことを意味している。しかし、この言葉は故意にその意味が限定されておらず、御子と御父との一致がより包括的で深遠であることがほのめかされている。ユダヤ人たちはこの含みを見逃さず、イエスが自分を神であると主張したと気づき、石打ちにしようとする（33 節）。イエスは神の子であり、ユダヤ人が期待している政治的メシアではない。御子と御父との一致は、「あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいる」とも表現されている（一七 21―22）。

⑦イエスに聞いて従う

ⓐユダヤ人たちに「もしメシアなら、はっきりそう言いなさい」と迫られたイエスは、自分に聞いて従う羊に「永遠のいのち」を与え、父と共に彼らを守ると答える。イエスは「メシア」という用語を使ってはいないが、その振る舞いによって、また父と一つだと断言することによって、メシアであることを示している。しかし、聞く耳を欠いた者にはそれが理解できない。

ⓑイエスは「信じない」ユダヤ人たちを「私の羊ではない」と言い、イエスの羊はイエスの声を「聞き」、イエスに「従う」と語る。イエスの言葉を聞く羊をイエスは知っている。「知る」という語は、ヨハネではイエスとイエスに従う者の交わり、イエスと神との交わり（一〇 14・15）を表す。人はイエスを「知る」ことを通してその父である神を「知る」（一四 7）。「永遠の命」とは、神とイエス・キリストを「知る」ことにある（一七 3）。イエスは自分の羊を知り、「永遠のいのち」を与える。羊に求められていることは、「聞く」ことと「従う」ことだけである。